

3 番ではだめなんですか

関西大学社会安全研究センター 小澤 守

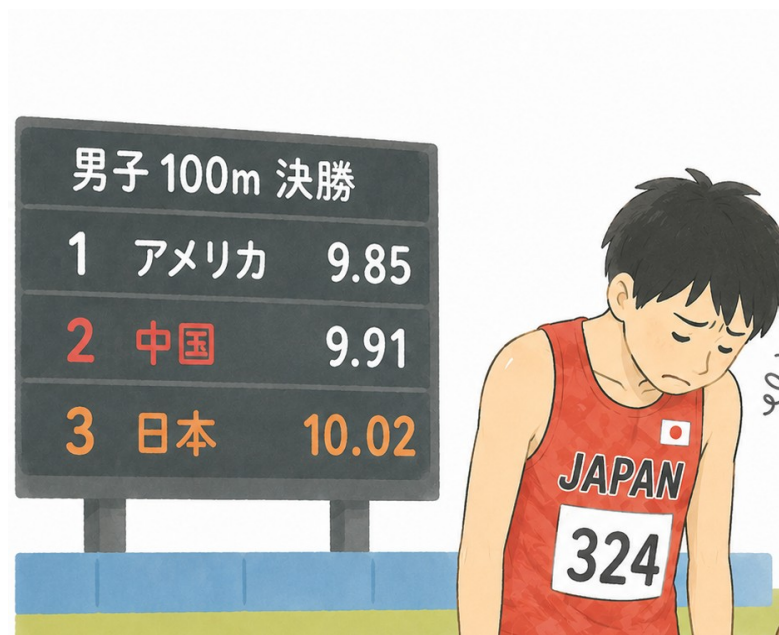
先ごろの新聞報道によれば、山中伸弥教授がノーベル賞に至ったiPS関係論文を公表してから20年経過したとのこと。その後世界中で関連研究が行われ、ここ10年間の発表論文数で見ると、米国が12000本あまり、中国が5000本あまり、そして日本は3800本弱という。なかでも最近論文の質の議論をするときに必ず出てくるのが、トップ10の論文誌に掲載された論文数であったり、更に高いレベルのトップ1%に入る論文数であったりするが、我が国はその後者の割合が1.5%であり、居並ぶ国々の中で15位とかなり低いようだ。

単純に考えれば米国は日本の3倍の人口であるから、同じ比率でiPS研究者がいるとすれば論文数はおよそ3倍の11000本、中国は日本の14倍だから53000本、実際にはその10分の1でかなり悪いことにもなる。ついでだから人口当たり論文数で見ると、米国 3.59×10^{-5} 、中国 3.67×10^{-6} 、日本 3.23×10^{-5} 、ドイツ 3.91×10^{-5} 、英国 4.04×10^{-5} 、スイス 7.27×10^{-5} 、韓国 2.09×10^{-5} となる。この基準で見ればスイス、英国、ドイツ、米国、日本、韓国、そして一桁小さくて中国という順である。評価の仕方でも順序などいくらでも入れ替わるのである。しかしながら若い人たちには、そのようなことに拘泥せず、真に社会に役立つ研究をやってほしい。

トップ10%やトップ1%と言っても何の基準で論文誌の順序が決まるのか筆者には皆目わからない。このような評価が蔓延する以前にはインパクトファクターなどが大学教員人事に影響を与えた。インパクトファクターばかり気にしてその人となりに目をつぶれば、かならずと言っていいほどあとで問題が発生する。

我が日本機械学会論文集は日本語であるために対象外、英文の論文誌でただか1.2程度だそう。その昔、中性子を使った研究をやっていた際に海外の核関連論文誌に掲載されたが、インパクトファクターはかなり高かったように思う。重視すべきはインパクトファクターやトップ10%より、その論文そのものが究極的には何を明らかにし、どんな影響を現在あるいは将来において社会に及ぼすかである。しかしその評価は単純ではないのであるから、各研究者の自由意思に基づいて様々な研究が行われ、例えば1000に3つのものが役に立てばよい。逆に、皆が全く同じ分野で研究を行ったとき、そこから外れた分野の研究がまるで無いことの方が大きな問題ではなかろうか。我が日本政府は戦略17分野における「主要な製品・技術等」を公表し、かなりの予算を付けるようだが、どうも短期的な要請ばかりに見えて仕方がない。最近だと「シマウマのようなしま模様を書いた牛がハエに刺されないようになるかを調べた研究」がイグノーベル賞を受賞した。単に笑いの対象ではなく、ひょっとしたらアフリカの土着の人たちの顔のペイントなどにも関係があるかもしれない。そんな自由な発想を摘み取ってしまうような予算の組立では、社会など決してよくはならない。筆者も一般の科学研究費などで論文の審査に長年関わってきたが、どこか時流に乗ろうとした

ものが多く、実際にはあまり面白い作業ではなかった。自身も創造性に乏しく、目立った研究はあまりやらなかったと反省してはいるが、いまさら遅い。ただしシンポジウムである研究成果を発表したとき、聴講者の何人かから「また眉唾研究をやって」と言われたことがある。筆者の大いなる勲章である。



ChatGPTを用いて制作した